禅林寺墓参り 茂吉詠む

文人の武蔵野

森鷗外 ⑦

森鷗外は、偉大な医学者であり文豪でした。鷗外以降も、山田風太郎、安部公房、北杜夫、加賀乙彦、渡辺淳一と続く医師兼文人の系譜は、近代文学史の一角を占めています。中でも鷗外に最も近い場所にいたのが斎藤茂吉です。

斎藤茂吉（1882～1953年）は、世田谷にある現在の都立松沢病院（1919年に一面麦畑だった武蔵野の地に建設）の院長（1927～45年）も務めた精神科医で、永井荷風や芥川龍之介も診察しています。高校時代に幸田露伴や森鷗外を愛読、正岡子規の歌集と出会い歌人を志し、子規の弟子伊藤左千夫の門下に入り「アララギ」の歌人として活躍します。柿本人麻呂や源実朝などを研究し、1万8000首近くの歌を詠み、『赤光』以降生涯に17冊の歌集を刊行します。

初夏に咲く栗の花

茂吉もまた鷗外を師と仰ぐ一人でした。1933年（昭和8年）6月1日の昼下がり、茂吉は「禅林寺なる鷗外先生の墓に詣」でたことを詞書にして、「栗の花香にたちて咲くひるさがり森鷗外先生のおくつきどころ」以下の7首を詠みました。

「武蔵野の小さき寺に君がみ墓うつされ来つつはや五とせか」などからは、禅林寺に移転する前の向島・弘福寺時代から鷗外墓を訪れていたことが伝わってきます。「禅林寺はまづしき寺とおもへども あはれたふとし草木もひそけく」や「ありし日のごとく君をし偲ばむと茅がやの原に憩ひつつをり」からは、荷風が「仙境」と呼んだ昭和初期の禅林寺界隈が偲ばれ、梅雨入り前の武蔵野に栗の花の香が匂い立つようです。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

おすすめの1冊

「白桃」

（岩波書店、むさし野文学館蔵）

戦時下の1942年に刊行された『白桃』は、斎藤茂吉11冊目の歌集です。52歳から53歳にかけて旺盛に作った1017首を収めています。この時期の茂吉は、親しい人を亡くし、また「悲歎」に暮れるような出来事にも襲われます。他方で、旅の機会も多く、そうした中に、鷗外墓参もありました。